Osaka University Knowledge Archive

Title	ever についての基礎的考察
Author(s)	吉村, あき子
Citation	Osaka Literary Review. 1990, 29, p. 36-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25487
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ever についての基礎的考察

吉村あき子

第1節　序

Klima (1964) において，（1）と（2）のような文における容認性の違いについて研究が成されて以来，any や ever, anymore といったような語句の分布を規定するために様々なアプローチが取られてきた。

（1）　Chrysler dealers don't ever sell any cars anymore.

（2）　＊ Chrysler dealers ever sell any cars anymore.

これらの語句は否定対極表現 (Negative Polarity Item) と呼ばれ，Baker (1970) によって「否定文にのみ現れる語や熟語」と定義されたが，明示的な否定辞を含まない環境 (before 節や if 節など）にも現れることが知られている。

このような否定対極表現（以下 NPI）の出現を包括的に説明しようとする現代の主要な試みとして，Linebarger (1981, 1987) と Ladusaw (1980) を挙げることができる。この小論では Linebarger (1987) を取り上げ，彼女の理論では before 節に現れる ever を説明できないこと，その意味と語用論的力を考慮しなければその出現をうまく説明できないことを示し，否定対極表現の分布に関する理論の1つの方向を示唆したい。

第2節では，NPI の出現に対する Linebarger の理論を概観し，第3節では，before 節に現れる ever には，Linebarger によって提案された条件を満たす NI (Negative Implicatum) が存在せず，明かな反例となることを示す。第4節では，基本に返って，どのような環境において before 節

の ever が容認されるかを観察し，その語の意味と trigger との関わりの重要性を指摘して，NPI についての理論の取るべき方向を示唆したい。

第2節　Linebarger (1987)

Linebarger (1987) では，NPI を容認可能にする条件を二つに分け，Part (A) では明示的な否定辞のある模範的場合を直接作用域制約によって説明し，Part (B) で，Part (A) では説明の付かない派生的場合は NI 理論によって説明できるとして次の様な制約を提案した。

Part (A)：直接作用域制約 (ISC)　(模範的場合)

ある文Sの LF において，NPI を表す下位定式が演算子 NOT の直接作用域にあれば，NPI はそのSにおいて容認可能である。もし (1) NOT の全作用域である命題の中にある要素が起こり，(2) この命題の中で，その要素と NOT との間に妨げる論理要素がないなら，その要素は NOT の直接作用域にあるという。

Part (B)：NI 理論 (NEGATIVE IMPLICATUM 理論) (派生的場合)

(i) 否定の implicatum 表現そのものは言語慣習的含意である。
NPI は命題Pを表す文Sに，次の2つの条件を満たす言語慣習的含意を与える。

(ii) 否定の implicatum の有用性。
Sによって implicate あるいは entail され，Sを発話することにおいて話者が意味しようとしていることの一部であるような命題 NI (P に一致してもいい) がある。NI を表す文S′の LF において，NPI の意味表示が否定の直接作用域に起こっている。SがS′と異なる場合に，Sを発話する時，話者はS′をほのめかしている。

(iii) NI はPを強める。
発話の文脈において，NI の真理は実際にPの真理を保証する。

具体的な例を見てみよう。普通，because 節を含み主節に否定辞がある (3) のような場合，その否定辞が文全体を否定する読み (4a) と，動詞句だけを否定する読み (4b) の2通りが可能である。

(3) a. George doesn't starve his cat because he loves her.

(4) a. NOT CAUSE[1] ([he loves her], [George starves his cat])
b. CAUSE ([he loves her], NOT [George starves his cat])
(Linebarger 1987)

ところが(5)のように NPI が主節にある場合には,否定辞が動詞句を否定する(6b)の読みのみが可能である。

(5) He didn't budge an inch because he was pushed.

(6) a. * NOT CAUSE (he was pushed, he budged an inch)
b. CAUSE (He was pushed, NOT [he budged an inch])
(Linebarger 1987)
(彼は押されたから微動だにしなかった)

これは,文全体を否定する読みの LF (6a) において,NOT と NPI の budge an inch の間に CAUSE という論理要素があり, NPI は NOT の直接作用域にはないためライセンスされないと説明される。動詞句を否定する読みの LF (6b) においては, NPI が NOT の直接作用域にあり Part (A) (ISC) を満たすため容認可能になるのである。

また, 次の例において,

(7) He didn't move because anyone pushed him.
(Linebarger 1987)

(8) NOT CAUSE (anyone pushed him, he moved)

Linebarger によると, (7) は「誰かが彼を押したから彼が動いたのではない」という文否定の意味を持ち容認可能であるという。上の制約に従うと次の様に説明できる。(7) の LF (8) において, NPI の anyone は CAUSE があるため ISC を満たさず Part (a) によってライセンスされな

い。そこで Part (B) を当てはめると，

(9) (7)の NI : No one pushed him. (取り消し不可能)

(10) (9)の LF : NOT ∃ x (x pushed him) x＝a person (→ ISC)

(7) は，明示的に (9) を伝達し，それは取り消しできない (Part (Bi))。さらに，(9) の LF (10) は ISC を満たしている (Part (Bii))。そして (9)「誰も彼を押さなかった」が真であれば，必然的に (7)「誰かが彼を押したから彼が動いたのではない」は真になる (Part (Biii))。従って (7) の NPI anyone は Part (Bi, ii, iii) を満たす NI をあたえているので容認可能になる。言い換えれば (7) の NPI である anyone は，それが明示的に伝える否定の NI (9) によってライセンスされると説明されるのである。

以上が，Linebarger (1987) による主張の概略である。この理論はあくまで NPI は否定辞によってライセンスされることを主張するもので，容認可能な NPI を含む文は必ず，その NPI を含む否定の NI を明示的に（取り消し不可能的に）伝達していなければならないことを要求している。次の節では，before 節に ever が現れる文は，上のような条件を満たす否定の NI を持たないことを示したい。

第 3 節　適切な NI を持たない before 節の ever

Higashimori (1986) は，Linebarger に従って，(11b) (12b) の容認性の違いは，NPI の ever が含まれる否定命題を明示的に伝達するかどうかによって説明できるとしている。

(11) a. Billy the Kid shot him before he got his cand on his gum.
b. Billy the Kid shot him before he ever got his hand on his gum. (Higashimori 1986)

(12) a. He brushed his teeth before he went to bed.

b. * He brushed his teeth before he ever went to bed.

(Higashimori 1986)

(11)(12) ともに before 節に ever を持たない a は容認可能であるが，ever が現れると (11) と (12) に示されているように容認性に違いが生じるという。この違いは，Linebargar (1987) に従って次の様に説明できるだろう。

(11b) は，顕在的な否定辞を含んでいない場合なので，Part (B) NI 理論によって NPI がライセンスされる派生的場合である。実際(11b)は NI: He never got his hand on his gun. を明示的に伝達するという (Part (Bi))。

次に，(11c, d) に示される様にこの明示的に伝達される NI (11c)の LF (11d)において，NPI の ever は否定演算子 NOT の直接作用域にある (Part (Bii))。

(11) c. He never got his hand on his gun. (NI)

d. LF: NOT (he ever got his hand on his gum)

さらに，この NI の真は，元の文 (11b) の真を保証する (Part (Biii))。

以上のように，(11b) は Part (B) NI 理論の要求する 3 つの条件を全て満たしているのでその NPI はライセンスされるのだと説明される。

一方 (12b) (床に就く前に歯を磨いた) においては (床に就かなかった) という命題は伝達されない。この文は，(歯を磨く) ことと (床に就く) ことがどちらも実際に起こり，その時間関係において (歯を磨く) ことの方が先であったことを伝えているだけである。(12b) は，その NPI をライセンスする取り消し不可能な否定の NI を持たないために容認不可能となるのだと，Linebarger の説はこの例をも正しく説明できる，ということになる。

ところが，次の (13)(14) のような例は上のようなやり方ではうまく説

明できない。“X before Y”のYに NPI を含んでおり，完全に容認可能であるにもかかわらず，“～Y”を明示的に伝達しないからである。

(13) You were coming here before you ever met her.
(adapted from *Christmas*)

(14) I lost my ticket before I ever got to the station.

(13) は，アガサークリスティーの *Hercule Poirot's Christmas* の1文で，その状況は，クリスマスーイブの夜殺人が起こり，億万長者が自分の家で殺される。その時その家には沢山の客がクリスマスパーティーのために集まっており，一人の男を除いて全ての客が招待客であった。警察がその男にここにきた理由を尋ねると，列車の中で美しい少女に出会い一目で恋に落ちた，それでその少女の後についてこの家まで来たのだと答える。数日後ポアロはある証拠を手にいれ，そこでその男に，(13)（彼女に会う前に君は既にここに来ようとしていたのだ）と言うのである。原文には ever は現れていないが，私のチェックした native は全て，このような状況では ever が現れる (13) の発話は完全に容認可能であり，むしろ ever のある方が言いたいことが良く分かるということであった。

この場合明らかに“X before Y”における～Y（君は彼女に会わなかった）を明示的に伝達しているのではない。ここでポアロが言いたかったのは，「その男は，彼女にあったからここに来たのではなくて，(Y) 彼女に会う前から (X) ここに来るつもりだったのだ」というXとY の時間的前後関係である。この場合 ever の出現はYの事実性に何の影響も及ぼさず，XもYも事実であることを認識した上で，Xの方が絶対的にYの前であったと主張しているのである。～Yが明示的に伝達されないということは，Linebarger の言う NPI をライセンスする NI が存在しないことになる。

同様に，(14) (～Y)「私は駅に到着しなかった」を明示的に伝達しているのではない。むしろ逆に，(15) に示されるように，(～Y) を (14) に後

続させると容認不可能になる。

(15) ＊I lost my thcket before I ever got to the station; in fact I didn't get to the station.

つまり，(X) 切符をなくしたことも (Y) 駅に着いたことも事実だと認識した上で，「Xは絶対的にYの前だったんだ」とその出来事の時間的前後関係を第一に伝達しようとしているのである。ここでも Linebarger のいう NPI をライセンスする NI がないことになる。

以上の考察は Linebarger の理論を根本から崩しかねない明らかな反例となる。Linebarger (1987) の主張を支持するためには，(13) (14) に“～Y”を含む取り消し不可能な NI がなければならない。そこでこれらの例に共通で，明示的（取り消し不可能）に伝達される“～Y”を含む適切な NI の候補を考えると，唯一“X before Y”は“At the time when X, not (yet) Y”を明示的に伝達する。ところが，この“At the time when X, not (yet) Y”を NPI をライセンスする NI だと仮定してもうまくいかない。例えば(14)を取り上げると，

(16) a. I lost my ticket before I ever got to the station. (＝14)
→b. # At the time when I lost my ticket, I had never got to the station (yet).
→c. At the time when I lost my ticket, I had not yet got to the station.

NI に相当する「私が切符をなくしたとき，私はまだ駅についていなかった」は，元の文の (14)（＝16a）に含まれる ever をライセンスするために，必ず ever を含んでいなければならないが，(16c)に示したように ever を含まない表現は容認されるけれども ever を含んだ (16b) は容認不可能である。(13) も同様である。

(17) a. You were coming here before, you ever met her. (=13)

→b. * At the time when you were coming here, you had never met her (yet).

→c. At the time when you were coming here, you had not (yet) met her.

結局 before 節に現れる ever をライセンスする NI は存在しないのだと結論せざるを得ない。Linebarger の理論はこの before 節の ever を説明できない，即ち明示的に伝達される否定命題が NPI をライセンスするのはない，ということになる。そこで，次節では基本に立ち返って before 節の中でもどのような場合に ever が現れ，どのような場合に ever が現れることができないのかを考察してみたい。

第4節 Ever の現れ得る before 節

私が観察した限りでは，“X before Y”において，Xが次のような場合には，Yに ever が現れることができない。

1. Xが命令形の場合

(18) * Please drop me a line before you ever come.

(19) * Take it down before you ever forget.

2. Xが心態表現を含む場合（心態表現が最も広い作用域を取る場合）

(20) * It must be done before he ever comes.

(21) * I want to take a trip around the world before I ever die.

3. Xが否定文の場合

(22) * I had not waited long before he ever came.

(23) * We shall not start before father ever comes home.

(18)～(23) は，ever のない形では容認されるが上の形では容認されない。これらの文に共通していることは，Xが時間軸に1定点を占める出来事 (event) ではなく，状態あるいは話者の心態を表現し，before 節はXが成立するあるいは成立すべき時間帯を規定する働きをしているということである。第3節でみたように，2つの出来事XとYが時間的にどちらが先に起こったのかタイプが異なっている。実際，第3節の (16) (17) に示したように，ever の現れることができる (13) (14) は ever を含まない“At the time when X, not (yet) Y”という形式で書くことができたが，上の (18)～(23) はこの形式に書き換えられない。

1. Xが命令形の場合：“At the time when X, not yet Y”に書き換えようがない。(18) (19)

2. Xが心態表現を含む場合(心態が最大の作用域)：同じ意味では書き換え不可能。

(24) a. It must be done before he comes. (=20-ever)

b. → MUST [it be done before he comes.]

×→c. At the time when it must be done, he will not have come (yet).

(25) a. I want [to take a trip around the world before I die.] (=21-ever)

×→b. At the time when I want to take trip around the world I will not have died yet.

(24a) のXにある must はその作用域としてX内部だけを持つのではなくて，文全体にその力を及ぼしている。そのため (24c) のように書き換えると意味が変わってしまう。即ち“X before Y”のXに文全体を作用域に取る心態表現を含む場合，同じ意味を持つよつに“At the time when X, not (yet) Y”と書き換えることはできないというこ

とになる。(25) も同様である。

3. Xが否定文の場合："At the time when X, not (yet) Y" は容認不可能。

(26) a. I had not waited long before he came. (=22-ever)

×→b. *At the time when I did not wait long, he had not yet come.

(27) a. We shall not start before father comes home.(=23-ever)

×→b. *At the time when we don't start, father will not have come home yet.

Xが否定文の場合には (26) に示したように，書き換えた形では容認されない。Givón (1978) の図形と素地という認知学的視点から言えば，普通素地として見做されている否定表現の表す状況が，"At the time when の後に続けられて1つの時点を表す図形となる状況を (26) において想定することができないからである。(27) も同様である。

以上のように，"X before Y" において before Y によってXの成立可能な時間的領域を規定する場合にはYに ever が現れないこと，ever がYに現れるのは，Xが時間軸上に1定点を持ち，XとYのどちらが先に起こったのかという時間的順序を伝達する場合である，ということが明らかになった。

言い方を換えれば，我々の認識において "X before Y" のXが時間軸に対して，その1つの着陸1つの着陸地点を定められずに漂っている場合，Yに ever は現れない。Yに ever が現れる場合には，Xは時間軸に対して，1つの定の着陸地点 (definite landing point) を持つことが要求される。そしてその1つのテストとして，"At the time when X, not (yet) Y" の形式に書き換えられる時，Yに ever が現れることができ，そうではない時には現れることができないといえる。

Xの特性については以上のように規定することができた。今度は，Yの

特性と ever そして before の関わりについて考察してみよう。

Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English / A. S. Hornby には，ever は次の様に記されている。

(28) adv. (usu in neg and interr sentences, and in sentences expressing doubt or conditions ; usu placed with the v) at any time.

そこで，ever が現れる表現は次のように表すことができるだろう。

(29) ∃ t (S at t) (t＝time)
（t においてSであるようなそんな時 t が存在する）

これを，例えば (14) の例に当てはめると，

(30) $\underbrace{\text{I lost my ticket}}_{X}$ before [∃ t ($\underbrace{\text{I got to the station}}_{Y}$ at t)]. (＝14)

XとYを用いて簡単にすれば，

(31) X before [∃ t (Y at t)]

である。これと ever の現れない "X before Y" とは，その真理条件は全く同じである。異なるのは，Yが成立する時 t の存在にまで言及した話者の情報的意図を，聴者が復元するそのやり方にある。

Yが成立する時 t が存在することは，Yが成立するための必要条件の1つであるから，(31) は「Yが成立するために必要な，いくつかの条件のうち1つが満たされる前に」と解釈される。話者が真理条件的には同じことを言うのに，わざわざ ever を用いて引き出そうとしたその語用論的効果は「Xが起こったのはYの決定的に前である」という強意，誇張の効果だと考えられる。従って，(13) You were coming here before you ever met her. のようなXとYの時間的前後関係が情報の焦点になるような発

話において，ever が現れるのである。

しかし，時間的前後関係を伝達するものには before だけではなく after もある。先に述べたような意味だけを ever が持つとするのであれば，after 節にも ever が現れて「Xが起こったのはYの決定的に後である」という用法があってもいいはずであるが，実際には after 節の中に ever は現れない。ところが any は現れることがある。次の例を見てみよう。

(32) John will replace the money before anyone ever misses it.

(33) a. ＊The mad general kept issuing orders long after his men ever obeyed them.

b. The mad general kept issuing orders long after there was anyone to obey them.

(34) ＊ She felt sick after she drank any of that wine.

(32) のように，before 節には ever も any もよく現れる。ところが (33) にあるように，同じような after 節でも ever は現れないが any は現れ得る。ところが (34) が示しているようにどんな after 節にも any が現れるわけではない。

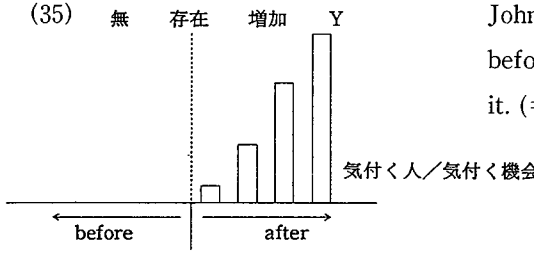
上の例は，恐らく全ての NPI に共通の素性と，ever にはないが any は持っている1つの素性を示しているように思われる。

全ての NPI は存在量化子∃で示され得る素性を持っている[2)]。ever は「Sであるようなそんな時が存在する」であり，any は「(それが修飾する) 何らかの物が存在する」である。そしてそれらの重要性は，「存在しない (無)」ことと境を接しているところにある。そしていずれも trigger (ここでは before や after) との相互作用によって，「無」の方向に向かう語用論的力を要求する) と仮定する。

違いは，「存在」から「無」への移行における存在を表すのか，「無」から「存在」への移行における存在を表すのか，あるいは両方を許すかとい

うことである。ever は「無」から「存在」への移行における存在を表し，any は両方を許すと仮定すると上の例はうまく説明される。直線は時間関係を，グラフは ever や any で表される存在の増減を表すとすると(32)は次の様に表すことができる。

(35)



John will replace the money before anyone ever misses it. (=32)

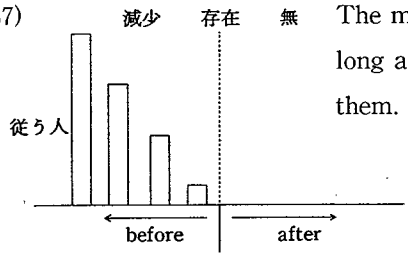
ここで“X before Y”におけるYの性格に注目したい。Y（誰かがそれがないのに気付く）という命題にたいする我々の認識は，any について言えば，誰も気付いていない状態から，気付いた人が一人存在する状態，さらにはその人数が複数に増加していくという変化をとり，決してその反対ではない。その変化の仕方は気付く機会 (ever) についても同じである。即ち，ever や any は我々の認識において「無—存在—増加」という移行形式をとる命題の「存在」を表し，trigger の before との相互関係の結果，語用論的力は「無」に向かい，我々に「無」を意識させる。これが否定対極表現 (NPI) の原子素性である。

従って，before の代わりに after が用いられた(36)は容認されない。(35)に示しておいたように after とYにおける ever と any との相互作用の結果は無に向かわないからである。

(36) ＊ John will replace the money after anyone ever misses it.

ところが(33)においては，我々の認識におけるYの移行形式が異なるため，after 節にも any が現れ得る。

(37)



The mad general kept issuing orders long after there was anyone to obey them. (=33b)

(33b) において，after 節に現れる命題Yは，我々の認識において「減少—存在—無」の移行形式を取る。即ち，気の狂った将軍の命令に従う者は，次第に少なくなって誰もいなくなるだろう，と我々は普通認識している。そして any は「減少—存在—無」の移行形式における「存在」をも表すことができ，trigger である after と相互作用した結果，その語用論的力は「無」に向かい，我々に「無」を意識させる。つまり「その気の狂った将軍の命令に従うものがいなくなってしまった時でさえ」ということを意識させるのである。

ところが ever は同じ NPI であっても，「減少—存在—無」の移行形式を持つ命題の「存在」を表すことができない。従って after と相互作用することができないため，同じような内容を持つ (33a) の after 節の中に現れることができないと説明できる。

以上のように考えると，(34) が容認されないのもうまく説明される。

(34)「彼女はあのワインを飲んだ (Y) 後気分が悪くなった (X)」において，Yは「無—存在—増加」の移行形式を持つ命題であって「減少—存在—無」の移行形式を持つ命題ではない。従って，その中に現れる NPI の any と after が相互作用して，「無」に向かう語用論的力を持つことができないのである。

以上のことをまとめると，“X before Y” において，「無—存在—増加」の移行形式を持つ命題がYで，時間軸に1定点を占める命題がXである場合，Yに ever が現れることができる。さらに，ever がYの成立する時の存在に言及することから before との相互作用によって，XとY

の時間的前後関係が強調されて，“At the time when X, not (yet) Y”が認識において際立つものとなる，ということができる。

第5節　結論

この小論では，否定対極表現の出現を否定の NI によって説明する Linebarger (1987) にとって，before 節に現れる ever が，明らかな反例になることを示した。このことは，明示的な否定辞のない環境に現れる NPI が，別の否定文においてライセンスされ，そこから NPI だけが抜け出て，文に現れるのではないことを示している。確かに，NPI を含む文が何らかの否定命題に関連づけられるのは事実だろう。しかしそれは，NPI の持つ素性と，その trigger の持つ素性と，さらにそれに関わる命題の持つ素性とは相互作用の結果生じるものであって，先に存在するものではない。このことを，before 節に現れる ever に限定して示すことを試みた。NPI の生起に関する包括的理論の取るべき方向を示唆できたのではないかと思う。

注

1）意味的曖昧性を引き起こす要素を論理要素と定義している。
2）cf. Yoshimura (1990).

参考文献

Higashimori, K. (1986) “Ever and Pragmatics.” [東森薫 “Ever and Pragmatics.”『英文学論叢』 京都女子大学英文学会。]

Klima, E. S. (1964) “Negation in English” Fodor J. and J. Katz eds. *The Structure of Language*. Prentice-Hall, Englewood Cliffs.

Ladusaw, W. (1980) *Polarity Sensitivity as Inherente Scope Relations*. Ph. D. dissertation, University of Iowa. IULC.

Linebarger, M. (1987) “Negative Polarity and Grammatical Representation.” *Linguistics and Philosophy* 10, 325-387.

Yoshimura, A. (1990) *A Pragmatic Approach to Negative Polarity*. M. A. Osaka University.